

日本図の変遷

～赤水から伊能へ～

小野寺淳 平井松午

……16

幕府に提出された日本東半部「沿海地区」は、一八〇四（文化元）年九月に十一代將軍徳川家齊の上覧を受けた。その後、伊能忠敬は幕臣（天文方手付）に登用され、西日本の御用測量にあたる。師の高橋至時は当初、大坂―長崎間の測量経験のある間重富に西日本測量を任せる考えであった。しかし、同年一月に至時が四十一歳で死去し、天文方の役職を継いだ十九歳の嫡男高橋景保を重富が補佐する必要が生じたため、六十歳を迎えた忠敬が西日本測量も担当することになった。

西日本の御用測量

西日本については当初、三十三月月かけて「西国四国九州隠岐対馬」の測量を実施する計画であった。しかし、瀬戸内島嶼部の測量に時間を要し、忠敬の発病などもあって、〇五年二月二十五日―翌年十一月十五日の第五次測量は、畿内・山陽・山陰だけで打ち切られた。幕府御用測量となったことから、測量隊員は十五―十九人と倍増し、測量先の諸藩からの手伝いも多数に及んだ。忠敬は地方の測量家とも交流したことから、これを契機に各地で実測地図が作製されている。その意味でも、伊能測量の影響は大きい。

その後も、〇八年一月二十五日―翌年一月十八日の第六次測量（四国・大和路）、〇九年八月二十七日―一年五月九日の第七次測量（九州東南部）、一年十一月二十五日―一四年五月二十三日の足掛け二年半に及ぶ第八次測量（九州西北部・本州内陸部）と続く。江戸帰着後は、半年余りかけて地図の製作にあたっている。この間、第八次測量では副隊長の坂部貞兵衛や長男景敬を相次いで失ったものの、忠敬は公儀測量の遂行に努めている。

高齢となった忠敬は、一五―一六年の伊豆七島測量や江戸府内測量には参加せず、日本地図の完成に向けて取り組んでいたが、一八年四月十三日、ついに未完のまま七十三歳の生涯を閉じた。その直前には、間宮林蔵から蝦夷地や国後島の測量データも忠敬の元にもたらされていた。

（ついでに）徳島大名普教授

「地方測量之図」（部分）、嘉永元（一八四八）年、国立国会図書館のウェブサイトで転載。89歳の幕師北斎が描いた当時の測量の様子。伊能測量でも同様な測量が行われた

